コードギアス　オレンジダイアリー

えんとつそうじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コードギアス　オレンジダイアリー

【Ｎコード】
Ｎ８０８１Ｔ

【作者名】
えんとつそうじ

【あらすじ】
前作、オレンジデイズの続編。
オレンジデイズとは違って、読み切りの詰め合わせという形を取ることにしました。
と言っても、えんとつそうじのことだからまた勝手に連載するかも？　その時はあしからず！

と、前置きはここまでにしておいて、帰ってきましたゴッドバルト農園！　息子ロロを中心に据えたオレンジデイズのその後のお話、

ロロがどのような成長を遂げるのか？　ゼロは？　ナナリーは？
そしてあの男は？　書くのかどうか分からないけど、皆様に楽しんでいただけたら、幸いです。
　では、農園の新たな日常へようこそ

お月様取って！（前書き）

みなさま、お久しぶりです。えんとつそうじでございます。
前作、オレンジデイズは皆様のおかげでなんとか完結をむかえることができました。そして、今回のオレンジダイアリーをはじめることができたのも、皆様のおかげです。
オレンジダイアリーは、前作とはちがって、キャラクターの視点を大事にして書いてみようと思います。
とまぁ、細かい話しはここまでにして、
オレンジダイアリー開幕！

お月様取って！

その農園は、ある山の中にある。
見渡す限り拡がる背の低い木々には、丸く大きなオレンジがいくつも実りを付け、夜風に吹かれてその身を重たそうに揺らしている。
空には大きな満月が光り、山の中に潜む鳥や他の動物たちの寝顔を、優しげな微笑みを浮かべて見下ろしていた。

この農園の名は、ゴッドバルト農園。
その家族が住まう2階建ての家を見ると、2階の窓から薄明かりが漏れている。

ちりんりん、と開けッ放しの窓から入って来た夜風が風鈴を揺らして、少し蒸し暑いこの部屋に涼を届けてくれた。その風が頬に当たるだけで、うっすらと額に貼り付いている汗が引いていくのが分かる。
「お母さん、つづき読んで、早く早く！」
「はいはい、でもこの絵本読んだらちゃんと寝るのよ？」
「うん！」
だんだんと重くなる瞼が下がるのを、我慢しているのが手に取るように分かるが、ロロは私と同じ黒い瞳をキラキラと輝かせて、絵本の続きをせがむ。その瞳が愛らしくて、私は夫によく似た緑がかったロロの黒髪を撫でて、指を挟んでいた青く大きな絵本を開いて、寝る前の読み聞かせを再開した。
「お母さん、お話読んで」
去年の春頃だっただろうか？　いつもの様に、私とあの人と三人で床につこうとしたとき、ロロがカノンさんに買ってもらった絵本を持ってベッドに飛び込んできた。読んであげると、ロロは今みたいに眼をキラキラと輝かせて、絵本に夢中になり、そして…いつの間

にか眠っている。子守歌代わり、というと少し寂しいけれど、ロロはそれから毎晩のように夜寝る前に絵本を私に読んで欲しいと、頼むようになった。

それから、『大きなかぶ』『マッチ売りの少女』『桃太郎』…次々と絵本が我が家に増えていった。トーキョーに買い物に出た時買った物や、ロロが絵本にはまっていると聞きつけた凪沙さんやセシルさんからいただいた絵本は少しずつ本棚にたまっていき、今では何を読んでもらおうか、とロロが困る程までの量となった。

「すご〜い、ねぇお母さんこの人、こんなたかいはしご登ってこわくないのかなぁ？」

「そうねぇ、きっと娘さんのために一生懸命だから、そんなのへっちゃらなのよ」

「かっこいいねぇ」

ロロはそう言うと、マジマジと絵本のキャラクターを尊敬の眼差しで見つめた。

今日、私がロロに読んでいる本は青い装丁に丸い大きなお月様が描かれた少し大きめな絵本、『パパ、お月様とって』だ。小さな女の子がお父さんに空に浮かぶお月様をとってきて欲しいとお願いして、お父さんが長い長いハシゴを用意して、月まで昇っていくというお話だ。お父さんがハシゴをのぼすとき、ページが上に開くよう工夫されていて、ロロに読み聞かせている私もつい夢中になってしまった。

「すごい絵本ね…あら、ロロ？　寝たの？」

「すぅー…すぅー」

いつの間にか、寝息を立てている息子に夏布団をかけて、絵本にしおりを挟む。正直、続きが気になるけど、私だけが終わりまで読んでしまうと、ロロはきっと怒るだろうから。

「咲世子、ロロは眠ったのか？」

「あなた…ええ、たったいま」

寝室のドアを開けて入って来たのは、私にこの暮らしをくれた最

愛の人、私の夫ジェレミアさん。ジェレミアさんは、ほかほかと湯気を立てる風呂上がりの体を机のイスに預けると、枕元に置かれた絵本に目を落とした。
「なんだ、また絵本を読んでいたのか」
「ええ。途中で眠ってしまいましたけど」
「『パパ、お月様とって』…か」
絵本の中のパパと、自分を重ねたのか、ジェレミアさんは少し困ったような微笑みを浮かべて、首にかけていたタオルで髪を拭いて、扇風機のスイッチを入れて涼みはじめた。
「フフフ、もしかしたら明日ロロに言われるかもしれませんね、「お父さん、おつきさまとって」って」
「う〜、やめてくれ。この子はそう言うこと、平気で言うからなぁ」
「あら、その時は頑張りませんと父親の面目が立ちませんよ？」
冗談に、本気で困った顔を見せるジェレミアさんを見て私は思わず破顔してしまった。ジェレミアさんはイスからひょいと立ち上がって、枕元の絵本を手に取って真顔で読み始めた。
もしかして、本気で月の取り方を考えているのかしら？
そんな事を考えている内に、私の意識はまどろんで、緩くなって…深い眠りに落ちていった。

翌日

「お父さん、お月様とって！」
朝食を終え、カノンとアーニャは仕事の準備をするために各々の部屋に向かい、咲世子が食器を洗い、私はソファに腰掛けて新聞を広げていた。その出だしを読もうとした瞬間、頬に米粒を付けたロロが、私の膝の隙間から竹の子のように生えてきて、瞳を輝かせながらそのセリフを言った…いや、叫んだ。
それを聞いて、私は思わず洗い物をしている咲世子に首を向けてしまった。助言と救援を求めるためだ。咲世子もロロの声が聞こえ

ていたらしく、こちらに振り向いている。だが、私と違ってその表情は笑いを堪えるのに必死という風情だ。『やっぱり』と『がんばってください』という彼女の声が、なぜか耳ではなく心に聞こえた。
「…どうしたの？」
「……いや、何でもない。ロロ、なんでいきなりそんな事言うんだ？」
「えっとね、きのうお母さんに読んでもらった絵本に出てきたパパさんがね、すごく格好良かったの！　だからね、お父さんもパパさんと同じことしてみてほしいの！」
「そうか…そうか」
　さて、どうしたモノか？
ロロの瞳を見る限り、本気で私が月まで行くことを期待しているのが分かる。それは、とてもとても嬉しいことなのだが…現実と絵本の世界は違う。誰がどうやったって、ハシゴをかけて月まで行くのは不可能だ。ＫＭＦ使って月まで行く…いや、無理だ。今現在で、大気圏突破できる性能を持ったＫＦＭは存在しないし、もしあったとしても今の私はタダの民間人。そんなＫＭＦはおろか、サザーランドにさえ乗ることはできない。
「ロロ…息子よ、良く聞いてくれ」
「うん！」
「お父さんもいろいろ考えたんだが…その願い、少し無理があるな。月まで届くハシゴは無いし、大きなロボットを使っても行けるかどうか怪しい…いいか？　そもそもだな、月と地球は３８万４４００？も距離が離れているんだ。しかも、地球には大気圏というものがあって」
「もういい！！　お父さんのばか！」
「あ、ちょ、ちょっと待ちなさいロロ！」
　私の言葉と新聞を、声と体で引き裂きながら、ロロはアーニャの部屋に向かって走って行ってしまった。そして入れ替わるように私達のやりとりを見守っていた咲世子が、そっと歩み寄ってきた。そ

の表情は、あきれ果てて困惑している…といった具合だった。
「あなた…」
「言うな…自分でも、情けないと思っていたところだ」
真っ二つに引き裂かれた新聞を片付ける私の肩に、咲世子はそっと、同情するかのように手を置いた。

「う～ん…今日も良い天気ねぇ」
サンサンと輝く夏の太陽に向かって背伸びすると、目には見えない紫外線が私の全身に染みこもうとして、日焼け止めクリームに弾かれているのが分かった。熱く、世界を真っ白に染め上げるようなこの季節は大好きだけど、紫外線だけはダメ。
「特に歳をとると余計に気になり出すのよね…あら？」
ふと、何やら気配を感じて目の前のオレンジ畑から庭の方に視線を向けると…桃色のフワフワした髪の上に麦わら帽子をのせた女の子と、その弟で私の甥っ子…黒髪の小さな男の子が何やら難しい顔を並べている。
「アーニャ、ロロちゃん何してるの？」
「あ、良いとこに来た」
「カノンおばちゃんも手伝って！」
「な、なにしてんのよ…って、本当に何してたの？」
そばに寄った私に気がつくと、二人は分けの分からないことを言う。仕事をさぼる算段でもたてていたのかと思ったけど、どうやら違うらしい。いや、厳密に言うとサボっているのと代わりはないのだけど、二人は何か別の事に夢中になっているようだ。
いつも、咲世子さんが綺麗に掃除している庭に、納屋からとってきたのであろうハシゴやロープ、虫取り編みや釣り竿…ｅｔｃｅｔｃ、がおもちゃ箱をひっくり返したかのようにばらまかれていた。
「…え～と、二人は何をしてたのかしら？」
「あのね、お月様を取る練習でね、お日様を取ろうと思ったの！」
「うん、ロロちゃんちょっとお姉ちゃん借りるわね」

日に焼けて、赤くなった顔を綻ばせて嬉しそうに説明するロロちゃんは天使のように可愛いいのだけど、それは説明になっていない。私は少し背が伸びたアーニャの肩に腕を絡めて、ロロちゃんに背を向けた。
「ちょっと…！　状況が良く飲み込めないんだけど！？」
「私もよく分からないんだけどね……」
そうして、ロロちゃんに聞こえないように小声で、アーニャは今朝いつものオーバーオールに着替えてる最中いきなり部屋に乱入してきたロロちゃんから聞いた話を、私にそのまま伝えてくれた。
「へぇ～懐かしいわね『パパ、お月様取って』なんて…う～ん、どんな話だったかしら」
「カノン知ってるの？」
「もちろんよ。私が子供の頃からある絵本よ…それにしても、ジェレミア情けない」
「うん、パパ失格。だから、ロロはオレンジがやらないなら自分がやる！　って言いだして…」
「それで、太陽をお月様代わりにして、夜のためにリハーサルしてたのね」
「うん」
なるほど、つまり庭中に転がってるこれらはロロちゃんとアーニャの四苦八苦の跡か。本気で月に手が届くと思っているロロちゃんも可愛いけど…それに付き合ってあげているアーニャも負けないほど可愛く思える。
「ねぇ、二人とも何してるの？」
「ん～ん、なんでもないわよ。よし！　ロロちゃん、お姉ちゃんから話は聞いたわよ。カノンおばちゃんもお月様取る練習手伝ったげる！」
「ホント！？　おばちゃん大好き！」
「えへへぇ…もっと、もっと言って」
「キモイ…」

アーニャが何か言ったが気にしない気にしない。彼女がこの叔母の楽しみを理解するのは、まだ先の事なのだから。
だから精一杯、私は叔母ちゃんの楽しみを味わおう。
「よし、じゃあロロちゃんは網を持って。そのロロちゃんを私が肩車！　そうすれば、お日様に届くかもしれないでしょ？」
「うん！」
トトト、と駆け寄って、私の足に抱きつく小さな男の子。その信じ切った瞳に、バカだなぁ、とも思う。だけどそれ以上に、それに付き合う私は叔母バカなのだろう。
目に入れても痛くない、食べちゃいたくなる…今までオーバーに感じていたその『可愛い』の表現を実感しつつ、私はロロちゃんの軽く小さな体をひょいと持ち上げて、肩に背負った。

一時間後。

「まったく、あいつらと来たらどこで遊んでいる？」
オレンジの収穫日が目前に控えているというのに、アーニャとロロの姿はオレンジ畑にはなく、カノンも事務仕事を咲世子に任せっきりにしている。大方、どこかで遊んでいるのだろうが、それは仕事が片付いてからでも良いはずだ。
「これは一つ、ガツンと叱るべきか？　いや、今朝のこともあるしこれ以上ロロに嫌われるのは…いやいや、ここは心を鬼に…いや、それでもだな…」
あの子（ロロ）が生まれてから、もう四年の月日が流れた。私の体のこともあり、どこか体に疾患がないか心配していたが、ロロはそんな事お構いなしに、この農園ですくすく…いや、ずんずんと成長してくれている。私達両親に似ずに、明るく活発な性格に育ったのは、ひとえに遊び相手をしてくれているカノンと、姉のアーニャのおかげだろう。
だが、ロロはもう四歳。そろそろ、少しずつでも責任というモノ

を学んでも良い年頃だ。
「よし、言うぞ…あの子が遊んでたら、ガツンと…叱ってやるのがオヤジのつとめだ」
たとえ嫌われても、疎まれても、我が子をよりよい未来に導かなければならない。それが、父親というモノのはずだ。
と、私が覚悟を決めたときだった。
「ヴヴヴヴゥゥ…ゲホ、ゲホ！」
庭から、なにやら異様なうめき声、人の声…で良いのだろうか？
まるで、物の怪の類が苦しんでいるような声が、庭から微かに、私の耳に響いてきた。
「なんだ？　お前達、そこに…い…る…」
声をたどって、私は真っ直ぐ庭に向かった。そして、そこで繰り広げられている光景に、思わず声を失ってしまった。
「アガガガ！　ファイトー！　ワタシィ！」
「が、頑張ってカノン…ロロ、と、届きそう？」
「うー、う～…！　ダメ、まだ届かない！」
全身から滝のような汗を流しているカノンの肩にアーニャ乗り、その上にアーニャの麦わら帽子をかぶったロロが肩車されて、賢明に太陽に向かって虫取り編みを振っていた。ロロはまだ元気だが、二人分の体重を支えるカノン、激しく動くロロを抑えるアーニャは、疲れ切っているのが一目で分かる虚ろな目をしている。
「お、お前達…何をしている？」
「あ、ジェレミア！　良いところに、ちょ、ちょっと代わって、も、もう腰が…腰がぁ！」
「カノン…！　今動いたら…！」
カノンのぷるぷると震える膝が、がくんと折れた。
「あ、も…だめ」
「何？　あ、うぉぉお！？」
そのまま力尽きたかのように前のめりに、カノンは倒れた。すると当然、上に乗っている二人も倒れてくる。

私はアーニャとロロを受け止めようと、咄嗟に腕を伸ばした。
が
「オレンジ、そのまま」
「へ？　ぐがぼ？！」
アーニャは崩れるカノンの背をロロを肩車したまま蹴って飛ぶと、私をクッション代わりに押し倒した。ものすごい勢いで背中を地面に打ち付けて、一瞬肺が縮んだ。
「ぐ…い、一体…何をしていた？」
「オレンジが情けないのが悪いんだよ…でも、私も疲れた」
そう言うと、アーニャはロロを私の胸に下ろしてから、糸の切れたマリオネットのようにドサリとその場に倒れた。
「本当に、何をしていたんだ」
「…フン！」
モノが散らかり放題、死屍累々の庭。その経緯を胸に乗る息子に聞いても、ロロはプイッと私からむくれっ面をそらすだけだった。

その日は結局、散らかった庭の片付けと熱中症になりかけていたカノンとアーニャの介抱で、仕事にならなかった。ロロは、二人の事を心配して氷や冷たい飲み物を用意するなどの手伝いをしたあと、肩を落として2階の寝室に上っていった。
なんとか二人が回復したのが、完全に日が落ちた夜。夜空には、星々と美しい満月がかかっている。二人が食べやすいようにと、咲世子は夕食にそうめんを作った。と言っても食べるのはカノンとアーニャだけ、私達夫婦はロロが下りてきてからだ。
「こうなったのも、ジェレミアのせいよ」
額にジェルシート《冷えピタ》を貼ったカノンが、咲世子が用意したそうめんをすすりながら私をジトリと睨みながら言った。そして、2階にこもりっぱなしのロロを見るように、一度だけ天井に愛おしげな視線を向けた。
「何故だ？　私は何も悪いことは…」

「した。ロロのお願い聞かなかったでしょ？」
反論しかけた私の口を、アーニャが塞ぐ。言い返せなくて、たまらず咲世子に助け船を出すよう目線を送ったら、咲世子は楽しそうな微笑みを返すだけだ。
「う…た、たしかに情けないことをしたと思ったが…だが、月を取るなんて…」
無理だ。と、続けようとしたとき、カノンがため息を吐いて、それを引っ込ませる。
「ああもう、本当にくそ真面目なんだから！　いい？　別に、月を取れなくても良いのよ」
「なに？」
「ロロちゃんはね、絵本の中のパパさんが娘のためにがんぱったように、あんたに頑張って欲しかったの！　理屈じゃなくて、行動を見せて欲しかったのよ」
「む…むぅ」
カノンの言葉に、言い返す言葉を見つけることができなかった。
「自分のために頑張ってるお父さんを見るのが嫌いな子供なんていないわよ」
「…そうだな、その通りだ」
「それが分かったのなら、行って上げなさい。ロロちゃん、お腹すかせてるわよ。月のことは、明日また考えればいいから」
「うむ…ん？」
カノンに促されて、ちゃぶ台から立ち上がったとき、ふと私の目にあるモノが映った。それは、本当に偶然だったが、確信の持てる閃きだった。
「どうしたの？　ぎっくり腰？」
「バカ言うな…アーニャ、カノン、咲世子、月のことを話しあう必要はない」
「え？」
「何故なら、今から私がロロに月を取って来てみせるからだ」

コンコン、とノックしてからジェレミアは親子三人で使っている寝室の扉を開けた。
「ロロ、いるか？」
「……」
灯りのつけられていない部屋から返事は帰ってこない。だが、窓から差し込む月光が、その窓辺にもたれる小さな男の子を照らしていた。
「ロロ、まだ怒ってるのか？」
「…ううん」
「なら、なぜしたに下りてこない。みんな、お前を待っているぞ？お腹も減っただろう？」
「うん、だけど…カノン叔母ちゃんとアーニャ姉ちゃん、僕のせいで…倒れた。それで、お仕事ができなくて・・」
ぽつりぽつりと呟く小さなその声は、どこかか擦れていて聞きとりづらい。ジェレミアが息子に歩み寄ると、ロロの可愛らしい小さな目から、涙が頬に伝った跡があることに気付いた。
この子なりに気にしていたのか、と息子の心の成長を嬉しく思いながら、ジェレミアは微笑む。
「二人は、そんな事気にしていないぞ？　だが、確かにお前のワガママで今日仕事にならなかったのは事実だ」
「…うん」
「その事を、反省しているかい？」
「うん…ごめんなさい」
「良い子だ」
ポン、とジェレミアはロロの頭に手を置いて、自分と同じ髪を愛おしそうに撫でる。そして、腰を下ろしてロロと視線を合わせた。
「なぁ、ロロ…お父さんな、実はさっき月を取ってきたんだ」
「え？」
「見たいか？」

「うん！」
暗く沈んでいた表情が一転、期待と喜びに塗り替えられるのをみて、ジェレミアはこそばゆそうに頬を緩める。昼間は、説教しようと考えていたくせに、自分も甘くなったものだと、内心自嘲しながら、1階から持ってきたそれを、窓辺において、ロロをひょいと抱き上げる。
「うわぁ…」
「どうだ？　絵本のようには行かないが…ちゃんと月があるだろう？」
ジェレミアが窓辺に置いたモノ、それは至って普通の、白いマグカップだった。だが、その中には水が充ち満ちている。
その水の表面に、夜空に輝く月がそのまま映りこんで、微かに揺れていた。
「すごぉい…お父さん、コップに月が入ってるよ！」
「ああ、綺麗だろう？」
さすがに、そうめんのツユに映り混んだ電灯がヒントになったとは言え無かったが、ジェレミアはロロの瞳が喜びと満足に輝くのを見て、胸をなで下ろした。
いつまでこうしていればいいのだろうか？　とジェレミアは考えたが、それを察したかのようにロロの腹の虫が鳴る。
「ロロ、お腹すいただろう？　お母さんがそうめん作ってるから、そろそろ下に行かないか？」
「うん…寝る前に、またお月様見ていい？」
「もちろんだ」
「えへへ…お父さん、今日はゴメンね…大好きだよ！」
「……お父さんもだ」
ロロに耳元で囁かれ、ジェレミアは思わず赤面してしまった。そして、少し歩く速度を落として、息子を抱えたまま家族が待つ居間に下りていく。
その背中を、空に輝く月と、夏風に揺られる水面の朧月だけが見

ていた。

お月様取って！（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
いかがだったでしょうか？　今回のオレンジダイアリーは、私が思いついた話しをそのまま放り込んでいく、一話完結の短編小説形式を取りたいと思います。
そのため、いきなりここかよ！？　という時間の流れの話しが飛び出してくるかもしれませんが、それはそれで、ダイアリー《日記》をパラパラ読んでいるモノと、思ってご容赦ください。
それともう一つ、今回のオレンジダイアリーでは、皆様からのリクエストを常時募集しております。こんなジェレミアが読みたい！
こんな話を作ったら面白いんじゃない？　というご意見がございましたら、どしどし感想かメッセージ機能でお送りください。また、キーワードも募集しております。たとえば今回の『月』のように、なにか皆様からキーワードを提案していただければ、それについてえんとつそうじが無い頭をひねって話しを考えて見ますので、どうかお暇があればリクエストおねがいいたします。
そんなこんなで、長くなって申し訳ありません。これからもよろしくお願いします。
では、次の後書きで

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8081t/

コードギアス　オレンジダイアリー

2011年6月4日17時27分発行